

小田原史談

第 144 号

発行所 小田原史談会
小田原市栄町2-13-20

相模國足柄下郡西筋町田村絵図

町田村は現在、小田原市の寿町一〜四丁目を中心に一部中町一〜二丁目、東町二丁目の町名となっている。

絵図は、延享元年(一七四四)に村役人から地方役所に差出された控で、七月二十一日の日付があり、「如是ニ相認地方御役所差上申候」と村役人連名捺印と宛先の地方役人の名が記されている。

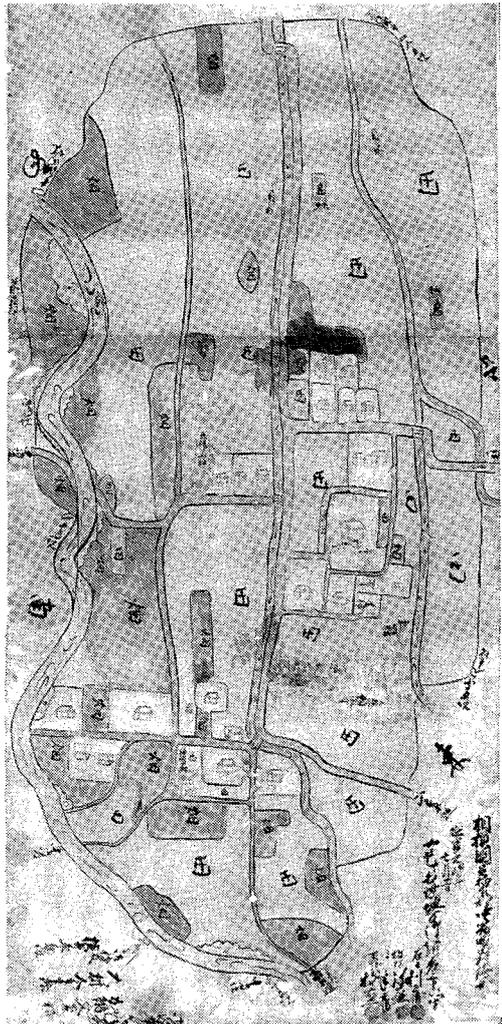
村役人は名主利兵衛(澤地)、組頭弥左衛門(林)、同平兵衛(神谷)、百姓代牧右衛門(不明)の四名、役人は改奉行年寄加納文右衛門、同大村金兵衛、代官横井平助の三名。

村絵図が現存しているのは少なく、それだけに貴重だが、府川の稲子家には、延享二年のものが所蔵されている。差出先は幕領の代官簽笠之助役所である。府川村は、宝永四年(一七五七)富士山大噴火後、幕府直轄地となり、延享四年に小田原藩領に戻っている。役所が復旧状況把握のため提出を命じたものと思われる。

町田村は、幕領とならなかつたらしいが、絵図は形式は異なるものの府川村と同年代のもので、勝手な推定だが同様の目的のためのものではなかつたらうか……。

村絵図の東、大雄山願成寺は、大永三年(一五三三)再興の勸進(募金)が行われてから六年目の享禄二年(一五三〇)に復興されたが、もとは早川庄勝澤(小田原市久野)に、足利氏満の祈願所として、応永三年(一三九六)に創建されたものだという。

澤地家はこの寺の大檀那という記録があり、林、日比野、須藤の各家と共に、寺の経済を支えて来た訳である。



澤地利三郎氏所蔵 縦106cm 横50cm

また、澤地家には、伊豆国君澤郡澤地村(現三島市)からこの町田村に移ってきたという伝承がある。その年代は不明だが、少なくとも室町期末の享禄には町田村に住んでいた訳である。

絵図の真中よりや、左上には氏神の山神がある。平野部に山神とは珍しく面白い。どのように解釈してよいただろうか……。村の草わけたちは、もと山地に居住していたのであろうか？

村絵図の戸数は二十三戸である。ちなみに、その後の変化を追うと、天保七年(一八三六)頃が二十七戸、明治二十四年(一八九一)が三十二戸、昭和十四年(一九三九)が百六戸、昭和四十年には五百五十四戸で田畑の宅地化は昭和三十年以降が著しいという。道路や用水の有様は、今も昔の名残りをとどめているが、大きく変化

したのは山王川(絵図には久野川)である。その蛇行を改修するために昭和三年八月頃、町田と中島とで山王川耕地整理組合を結成するが、発足に至る迄に、紛糾に紛糾を重ね、その根は、年賦返済で金融機関からの借入金が無済した昭和二十年に至っても、なお残っていた。

その辺の事情を知らずに、澤地利三郎氏は林栄太郎氏等と共に耕地整理竣工記念碑を建立しようとして碑石まで準備したが、年寄りの反対にあつて沙汰止みになった。原因は、予算より経費が高み負担が多くなり、また、宅地の縄伸び分まで出さなければならなかつた不満が尾を引いていたのである。しかし現在、中・青年層の間では、耕地整理をして貰って良くなった、という言葉が取り交わされるようになっていく。

(岡部 忠夫)

小田原叢談(四)

石井富之助

松原神社界わい

松原神社界わいとは旧宮小路、青物町、高梨町、宮前町、本町、中宿あたりまでのことと考えてのことであるが、このあたりほど長く繁盛を続けている地域はない。それは北条時代から現代に至るまで四百年以上も続いているといつてよいのである。

北条時代に小田原が繁栄したことを証明するために歴史家はよく『小田原記』のつぎの記事を引用する。

相州小田原の政治は私心がなく、民を大事にしたので、近国他国の人民はその恵みをして家を移し、全国各地の町人職人が西国北国からも集ってきた。昔の鎌倉もこれほどであったろうかと覚えるばかりに見えた。東は一色から板橋に至るまでの

一里の間、店を張って商賣がさかんに行われた。山海の珍珠、琴、碁、書画の細工に至るまで、これといつてないものはなかった。異国の唐物や、まだ目にも見えず、聞いたこともない器物もたくさん積んであった。その売上の利益は、京塚などの市にもまさっていた。民の生活も豊かであらゆる商売が繁盛していた。

多少のおまげがあるかも知れないが、なかなかの繁栄ぶりである。その中心が松原神社界わいであったことは、他の文献から見ても想像するに難くない。

江戸時代には大久保十一万三千石の城下町、箱根の嶮をひかえた東海道屈指の宿場町として栄えた。

宿には問屋場が東西二か所あった。東は高梨町、西は中宿町にあり、本陣四軒、脇本陣四軒のうち一軒がちょっとはずれているだけで、あとは全部この間にあった。だからここが町の中心部であったことはいうまでもない。

明治維新後、小田原は城下町、宿場町という特殊な地位を失って、地方の一小都市に成りさがってしまった。しかし、松原神社界わいはそれなりに町の中心としてのにぎやかさを保っていた。

それは松原神社が総鎮守として町民全体の尊崇的であったこと、近くに諸官公庁、学校が集っていたことによるものであるが、まだこのほかにもいろいろ理由がある。

その一つに花柳界の誕生と発展がある。江戸時代には多くの遊女屋が東海道筋に散在していて、明治に入ってもそのまま営業を続けていたが、明治十五年ごろから芸妓の数がふえはじめ、それにつれて貸座敷業から料理屋に転業するものが増加して、ここに花柳界の誕生を見るに至った。

当時小田原は保養地、別荘地として京浜の人々を迎え入れようとしていた。ちょうどその矢先、明治二十一年に国府津と湯本とを結ぶ小田原馬車鉄道が開通し、翌二十二年には伊藤博文が御幸の浜に滄浪閣を作った。それに伴って十字町方面に移り住む者も次第に増加した。

このような情勢の中で花柳界は逐年発展の道をたどったが、明治三十六年、遊女屋全体が新玉町に移転し、初音新地を形成するに及んで、あとに残った花柳界はいよいよ栄え、常に芸妓百人以上を抱えて、長くこの界わい繁栄の大きな源泉となったのである。

もう一つの理由は劇場、寄席のほとんどがこの地域にあったことである。

江戸時代においては、劇場を府内に建てることは禁止されていたので、わずかに寺町に桐座があっただけであるが、明治に入ると早くも宮小路に劇場を建設することが許された。これはどうやら実現しなかったようであるが、明治九年には旧茶畑に鶴座ができ、同十四年には宮小路に幸座が

開場した。幸座は二十三年に火災で焼失し、二十六年に再建されて若竹座となり、さらに二十九年に富貴座と改称、大正四年に活動写真常設館となつて、長く市民に親しまれた劇場であった。また大正二年には本町に有楽館、震災後旧青物町に復興館、御幸の浜通りに娯楽館などの館ができた。このほか寄席もいくつか作られて、この地域はあたかも市民の娯楽センターのごとき観を呈した。

このように、松原神社界わいは信仰の中心として、また市民娯楽の中心として栄え、それと共に商店街も繁栄を続けてきたのであるが、大正九年熱海線小田原駅開通の後には繁華街としての第一位の座は駅周辺に譲らざるを得なくなった。

花柳界は今ではまったくさびれて昔日のおもかげは見られなくなったが、それでもなお、松原神社を囲んで中央劇場、小田原日活、東映、オリオン座等の映画館があり、バー、喫茶店、料理屋も多く、アミューズメント・センターとしての機能はほとんど失われていない。その点から見ると、松

原神社界わいは小田原で最も息の長い繁華街といつて

よいのである。

新道の話

新という字がついていると一應は新しいものと思うが普通であるが、かならずしもそうとは限らない。

小田原には新という字のついた道路が三つある。新道、緑新道、新玉新道である。

このうちで最も古いのは箱根口から本町小学校の南側を東西に通っている新道である。これはしんみちと読む。

『相模国大意』(天保ごろの写本)という本の中に新道 御城内箱根口から鐘撞堂までお堀端往來の道である。

これは中ごろに長沼流軍学の師範で山下与太夫という人が召し抱えられた時、この通りは通行を禁ぜられた方がよいと申し上げた。それで筋違橋町の裏は往來をとめてしまったが、丑年の大火の後、この道がないと火事の時など死傷者が出たりすることがあってはと

いうわけで、また今のように道をあけることになった。それ以前はお堀のきわまで垣根を結び渡してあった。お堀にはあしやかやが生い茂り、うっとうしいほどであった。ある時旅人が本町に泊った。折から長雨が降り続いてきたが、堀の方であやしい鳴き声をするのを聞いて、あれはうわばみだといったという。そんなにさびしい所だったのに今はこのような往來の街となった。という記事がある。

今の新道の所を流れている川は三の丸の堀の名残である。鐘つき堂はそのころは今の料亭柏又のあたりにあった。中ごろというのはいつのころかはつきりしないが、宝永の絵図にはまだこの道はなく、安政の絵図には書いてある。新玉新道は旧台宿の北のはずれから広小路の東端までの道路で、新道にくら

べればずっと新しい。明治十四年五月に完成した。新玉町にできた新道だから新玉新道という。緑新道は銀座通り旧須藤町の南端から平井積善堂の裏の所までの道で、明治十五年十二月十日に開通した。

明治三十三年に馬車鉄道にかわって電車が開通した時の写真を見ると、幸町の停留所のところにはまだ三の丸の堀がある。この堀は多分郵便局前まであったろうと思うが、いくばくもなくそれが埋めたてられて約二メートル幅の川となった。

この川は平井積善堂の南側(現在道路の下になっているが)を東に流れている。緑新道のはしにこの川を渡る石橋があつて緑新橋といつた。

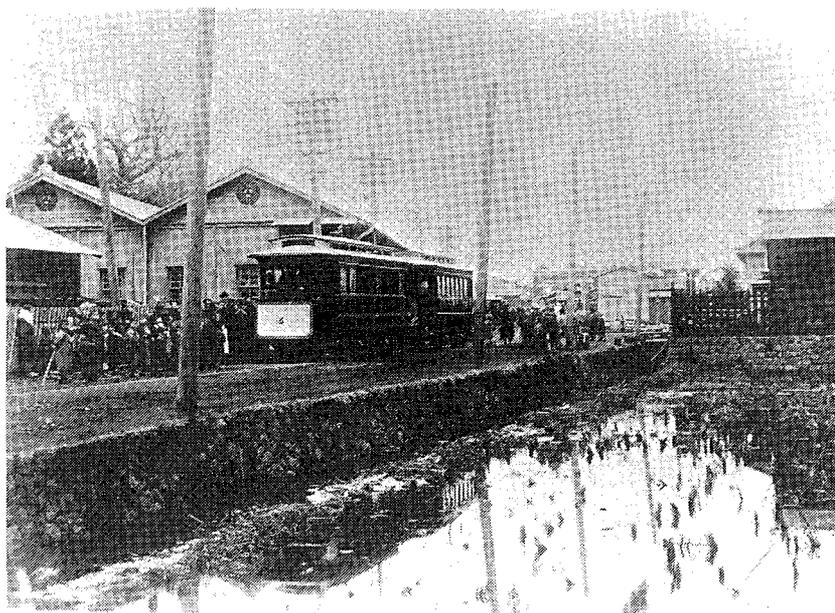
さらにそれから先の県合同庁舎までの道は十一年遅れて、明治二十七年七月に開通したが、ここには町名がなく、七区という名で呼ばれた。

この三本の道路を特にここにとりあげたのは理由がある。

小田原の絵図で古いものに属する稲葉時代の「相州

開通当時(明治三十三年四月)の幸町・小田原電気鉄道会社前

手前は三の丸堀 現在は国道一号线
〔東京電力小田原営業所前〕



小田原絵図」と現在の地図とを重ね合わせてみると、小田原駅附近を除いてはほとんどピタリと一致する。つまり江戸時代の道路網がそっくりそのままの形で残っているわけで、まったくの

新しい道はこの三本の道だけだということになる。このことはちょっと気がつかないことだと考えられたので、あえてここに示したわけである。

山上宗二と千利休

— 小田原北条四百年遠忌記念講話(二) —

岩崎宗純

翌、天正十一年(一五三三)十月九日に、宗二は秀吉の怒りを買って追放されてしまいます。浪人の身となった宗二は北陸方面、おそらく金沢周辺を放浪していたと思います。翌天正十二年になりますと、秀吉の怒りが一時解けて、六月八日には秀吉のお茶会に、今井宗久等と出席しております。更に天正十三年に、再び秀吉の怒りを買って追放され、今度は全くその地に居れなくなってしまう。はつきりした事実をつかめておりませんが、高野山に暫く身を隠していたと言われております。天正十三年五月以降になりますと、その頃の今井宗久、津田宗及、その他の人達が残りました茶会記一切から宗二の名が消えています。

東路へ下る

天正十六年(一五六八)二月

二十七日に「いよいよ畿内を出発して今日東路をさしてまかり下る」(裏千家本『山上宗二記』奥書)という言葉を残しております。東路をめざして畿内を発ったという事になります。宗二がめざした所が小田原であった事は、様々な事実からはっきりしてきます。小田原北条氏のことを記した、『異本小田原記』の中に、こんな記述があります。

「このかた宗二と申す数奇者小田原へ下りて茶の湯ことの外はやり、おやかた(北条氏政・氏直)をはじめ諸人これをろうす。この頃は早川あたりに茶屋あり荻窪久野の野辺にも茶屋あり、御一門衆異風の茶の湯とて或は巡礼になり俵を担ひ、或は行人や虚無僧になり茶屋に入ること日々なり」という事で、宗二が来て、小田原では北条氏の御一門衆或はその側近、重臣達の

間にお茶が盛んになってきた事がわかります。

宗二が利休直伝の茶道書と言われている『山上宗二記』を当時小田原におりました北条氏の重臣であります板部岡江雪斎と、天正十八年の段階では小田原方について戦ったが後に一早く家康の軍門に降った下野の皆川山城守という二人の武将に送っている事実からも、宗二が確かに小田原にいて、それなりのお茶の指導をしていたことがわかります。

小田原天明釜

もう一つ、宗二の影響があるのではないかと考えられますのが、当時小田原で生れた「小田原天明」と言われる茶湯釜です。天明釜は、西の芦屋釜、東の天明釜と言われ、釜の二大双壁みたいな存在ですが、小田原で天明釜とよばれる釜が出来る前は、佐野天明釜が一番名の知られたものです。その後小田原でも天明系の形をした釜が造られるようになりまして、後の書に依りますと、それが「小田原天明」と呼ばれるようになったそうです。

小田原には山田次郎左衛

門という鑄物師がおりました。この鑄物師は河内狭山の生れですが、天文元年(一五三二)小田原新宿にやっ

てまいりました。小田原が北条氏の本城下になると、次第にいろいろな仕事が増えて、町も盛んになり、各地から職人が集って来るようになります。この新宿の鑄物師山田次郎左衛門は、天正十八年の秀吉の小田原攻めの際には、一門を率いて、鑄物師の棟梁として周辺の千津島とか領国内の鑄物師も指導して、大筒(大砲)や鉄砲玉の鑄造をして小田原攻めに備えたという文書が残っています。勿論この鑄物師は、平時には鍋釜や茶湯釜を造っていたという記録も残っています。

「小田原天明」は、おそらくその鑄物師の伝統と、その後やって来た山上宗二の茶道者によるお茶の流行、それらが合体して、新しい形の茶湯釜となって小田原で生れたものと考えられます。

いわゆる紀年銘があり、年代も明らかで「小田原天明」は、私はまだ拝見した事がございません。茶湯釜を沢山持っている五島美術

館あたりに「小田原天明」とよばれる釜が幾つかありますが、それが何故「小田原天明」とよばれるのか判らない点が多々あります。

「小田原天明」というものが、記録の上では確かにあったという事、それから一部の工芸者や美術史家の中では「小田原天明」は鑲付の部分に全部貝の意匠がしてあるのが特徴であろうとも言われております。「小田原天明」については、まだまだこれから実体を採り出す段階にあると言えるでしょう。

以上申し上げましたように、『異本小田原記』の記述、或は『山上宗二記』があったという事、しかもそれが北条氏に属していた皆川山城守とか、重臣の板部岡江雪斎に贈られている事実、そして「小田原天明」という茶湯釜が造られるようになった事などから、山上宗二が確かに小田原でそれなりの仕事をしてきた事が、おわかり頂けると幸いです。

『山上宗二記』奥書

さて、これまで時々触れております『山上宗二記』

について、お話をしてみた
と思います。

『山上宗二記』というの
は、茶道者山上宗二が、利
休に二十年間師事し稽古に
はげんで、その中から体得
した茶の真髓、利休の言葉
を通して得た自分のお茶に
対する考え方、そういうも
のを総てまとめた利休直伝
の本でして、本来利休の言
い残した著書に『南坊録』
があります、その『南坊
録』以上に史実の上で非常
に確かな、利休直伝書と言
われております。

『山上宗二記』は六本現
在しております。最初に書
かれたのが天正十六年一月
二十一日、自分の子供であ
る伊勢屋道七に宛てたもの
でございます。同年二月二
十七日には桑山修理大夫宛
のものがございます。それ
から最近、公になった裏千
家本と言われる雲州岩屋寺
宛のものがございます。そ
して同年五月、やはり京都
の今日庵に蔵されておりま
す。林阿弥宛のものがござい
ます。これ等が天正十六年
に書かれた四本でございます
。その後、天正十七年二
月に板部岡江雪斎宛に、そ
の翌年三月には皆川山城守

宛に、それぞれ作られたも
のがあります。この様に六
本の『山上宗二記』が残っ
ていますが、この中の林阿
弥宛の『山上宗二記』の奥
書には、こんなことが書い
てあります。「ご一同ご懇
望においては氏規模によろ
しくご披露候也」北条氏規
(天正十八年には蕪山の城主
として秀吉の大軍にとり囲ま
れても最後まで抵抗し戦った)
が、もしこの茶道書をご所
望でしたら、宜敷くご披露
して下さい、書いてあげま
す。という様な内容です。

この林阿弥という人は、阿
弥号から同朋衆だと思いま
す。いわゆる同朋衆は、足
利義政・義満の周辺につか
えて、絵画の目利きをした
り、お茶を点てたり、將軍
の傍でつかえる人達です。
この林阿弥も、おそらく北
条氏の同朋衆だったと思い
ます。だからこそ氏規とも
近いし、この様な奥書が書
かれたと思われまます。

五番目の板部岡江雪斎に
宛てた本の奥書には、こん
な風に書かれております。
「浪人中ご奉仕を以て当府
に堪忍仕るの条二十年余稽
古の体大抵申し度く候」秀
吉に追放され浪人の身とな

り、この小田原に来ていろ
いろ厄介になりました。二
十年間私が稽古をした総て
をここに書き綴ります。と
いう様な内容だと思います。
『山上宗二記』と呼ばれ
現存している六本のうち三
本が北条氏と関係がある
という事は大変興味がありま
すし、宗二と北条氏そして
お茶との関係が非常に深かっ
たのではないかと思います。

早雲寺第五世 明叟宗普

さて、この様な山上宗二
が秀吉に追放されて目差し
た所が政宗のいる会津でな
く、他の大名達の所でもな
く小田原であったという事
は、小田原と京路を結ぶル
トやコネがあったのではな
いか。そのルートに従って、
その紹介によって宗二は小
田原にやって来て、そこに
住み、お茶の指導をしたの
ではないかと思います。

それでは京都、堺、小田
原を結ぶルートは何処にあっ
たかと言いますと、やはり
早雲寺にあったと私は思いま
す。ご存知のように早雲
寺は、北条早雲にかつての
結縁によって、京都の大徳
寺の以天宗清が開山となっ

て以来、北条時代、早雲寺
の住職は代々京都大徳寺に
入山されていきます。いつも
京都・箱根を、お坊さんが
行き来していた間柄と、思っ
て頂いてよいでしょう。

宗二が追放されて小田原
に来る時期前後の状況から
考えて見ますと、一人特定
の早雲寺住職の名前がわか
んでまいります。早雲寺第
五世明叟宗普みょうそうそうふといふ僧で
あります。この人は天正年
代の早雲寺を中心とした早
雲寺派の実力者として、特
にやはり注目しなければな
らないのは、元龜二年(一五
七)に京都大徳寺の住職に
なりますが、その後招請を
受けて堺の南宗寺の住職に
なっていることです。南宗
寺の住職になった年がはっ
きりしませんが、宗二が追
放され小田原に来る以前の
天正十六年初頭ぐらいには、
すでに南宗寺の住職であっ
たことがうかがわれます。
ですから、南宗寺に明叟宗
普が居た頃、宗二は追放の
身となってどこかに居たわ
けです。その頃ある接点があ
ったのではないかと、私
は推測しております。

東の早雲寺と言えは西の
南宗寺と言うように、南宗

寺は大徳寺派の中でも名刹
でした。三好長慶という守
護大名によって建立された
寺ですが、千利休、今井宗
久、津田宗及のような堺の
納屋衆の菩提寺であります
と同時に、その大茶人達が
出入りする寺でもあり、お
茶の上でも非常に結びつき
が強かった寺でもありまし
た。ですから一つの推測と
して、南宗寺に居た明叟と
宗二の接触があり、或は明
叟の紹介というか保護によっ
て、北条氏の本城がある小
田原にやって来たと、私は
考えています。宗二が死ん
だ天正十八年四月十一日か
ら五日目に、奇しくも、明
叟は小田原城で断食自書を
して亡くなります。天正十
七年にはすでに堺から小田
原へ帰って来た明叟は、秀
吉と北条氏の対立がだんだ
んと激化していく中で、秀
吉と全面的な対立すること
の不利を、北条氏政・氏直
にいろいろと諭すわけです
けれど頑として言う事を聞
きません。そして、遂に秀
吉の小田原攻めが始まって
しまふわけです。だんだん
形勢が悪くなってきた、自
分の弟子達と共に、小田原
城内に難をのがれるわけで

すが、いずれはもう滅びるであろう事を見通して、天正十八年四月十五日小田原城内で、大壇家の滅亡をこの目で見るとは心苦しいと、断食自害してしまいます。そういう事で宗二、明叟はこの小田原合戦の中で亡くなってしまうわけです。

利休の思い

さて話を利休に移しますが、自分の愛弟子の宗二がお茶会あぢあひで秀吉によって惨殺されてしまう、その時利休がどんな思いで、それを見

ていたかという事になりますと、それはもう私がいずれ以上話す事が出来ない小説の世界になってしまいます。これ以上お話は出来ませんが、何か利休がその時、或はその後の心情を手紙にも書いていないかと、いろいろと利休の手紙を調べた事がございます。

小田原在陣中の利休の手紙は六点左右残っておりませんが、その中で最も有名なのは「武蔵野鏡」という書状で「田城寺」という花入あなぐみれと共に利休の高弟であっ

た古田織部に送られたものです。それから最近、三井文庫から発見されました書状に、京都の男山八幡宮の社掌である実乗に宛てたものが残っています。その他京都の大仙院の和尚に宛てた手紙など数点残っていますが、それ等の手紙の中に、利休が愛弟子を失った悲しさ怒り或はその場の事情等が、全然書かれていないわけです。当然かも知れませんが、そういう事で、その時の利休が秀吉に対して、どんな思いを持っていたのか分か

りませんが、唯、先ほどの三井文庫の男山八幡宮社掌実乗に宛てた手紙の一部にこの様なことが書かれておられます。「小田原あはれをもよほし候涙ばかりに候」この手紙が書かれたのは、宗二が惨殺された十日余りの四月二十二日のものとして、文面どおり読みますと、秀吉に同道して今盛んに築城中の石垣山いしがき(六月に一夜城は完成)に登って眼下の小田原を見下ろすと、小田原城は二十一万余の秀吉の大軍によって幾重にも

成されて行ったことは忘れてはならない。
なお明治十年代は藩閥官僚による独裁政治に反発して自由民権運動が全国に燃えひろがって行った。小田原では明治十三年に十字町じゅうじの土族松本福昌外十三名を發起人とする、相模国九郡五五九町村、二、三、五五人の署名を得て国会開設の請願書を元老院に提出したくらいで、政治的には格別の動きは見られない。民権運動の強大な力に押されるように、伊藤博文は明治二十三年を目途として憲法を制定、国会を開設すること

近代小田原百年史稿(二)

高田喜久三

明治期の小田原(二)

日本の明治十年代は、明治維新の急激な変革に反抗した幾多の内戦を克服して、いよいよ、近代化日本の建設に専念する時代に入ったのである。西郷隆盛と手を携えて維新の大業を成し遂げた大久保利通は、明治十年、盟友西郷を涙を呑んで

切り、翌十一年にはこんどは自らが兇刃をうけてその雄途を断られた。そして以後は長州出身の伊藤博文と山県有朋を主な指導者として、富国強兵、殖産興業への途をまっしぐらに走ってゆくのである。但しこの過程の中で幕藩以来の農民は置き去りにされ、むしろ農民収奪の上に明治国家が形

を声明したので、さすがの民権熱も政党運動へと転化して行ったのだが、明治二十三年、伊藤らは独乙帝国に見習って欽定憲法を發布、帝国議會を開設して一応近代政治の形は整った。しかし、この時から国家権力が急速に強大化して、これより五十六年のちの昭和二十一年民主憲法が制定されるまで日本帝国時代がつづくのである。

以上のような情勢の中で、明治十五年に、東京へ出て勉学している小田原出身の学生らによって結成された「咽東会」なる団体が発刊

とり囲まれて、もう落城寸前の状態、利休はそれを見ながら小田原の今後の運命を見据え、「小田原あはれをもよほし候涙ばかりに候」と同情し、この様に綴っているともとれますが、私は、これは感傷的な解釈かも知れませんが、利休の残した「涙」の中には、秀吉によって殺された自分の愛弟子への涙が、奥にちらりと光っているのではないかと、自分自身も心の中で泣いているような思いがしてなりません。

早雲寺に於ける山上宗二惨殺事件は、今多くの歴史家が言っていますように、やがて後に、秀吉と利休の全面的対決となり、そして利休自身も秀吉によって命を断たれてしまうという事件に発展していく。その伏線が、この宗二惨殺事件に含まれていると言えます。早雲寺での山上宗二惨殺は、日本茶道史の上でも、大きな意味合いを持っています。私は、私を考えておられます。

(田口 鏡子)

(未完)

した『函東会報告誌』—明治三十一年まで発行—が小田原の明治史に貴重な資料を提供したことは特筆されてよいと思う。この会報誌には北村透谷をはじめ各界の知名士が筆を執っていて、小田原明治を語る資料の少ない中で、片岡永左エ門編の『明治小田原町誌』と並んで貴重な郷土史料となっている。

通観して小田原の明治期の眠ったような史実の中で、明治の小田原人が学校教育の振興に異常な熱情をそそいだことは案外と知る人が少ないのである。何故ならそれらのいずれもが成功していないからである。大久保藩中興の英主と言われる

大久保忠真が、藩士の文武稽古所として藩校「集賢館」を創立したことはよく知られているが、大体旧幕藩時代を通じて、小田原所領の農村地帯には数多くの寺小屋が存在して、農民たちに「読み、書き、そろばん」の教育が行われていたことは、小田原地方が由来子弟の教育に熱心な精神風土を保持していた結果ではないだろうか。これは小田原のあらゆる面を語る上で、見逃してはならない要素ではなからうか。

川柳

高井喜雄

長生きしたいと思う日思わぬ日

億の字もチラシの中で見慣れてき

帰宅して気づいたカギの掛け忘れ

洗濯機にまかせてあとはメロドラマ

畳替えしてから妻の顔を見る

歴々語っていた。北海道札幌の開拓、開村でよく知られる小田原大友村出身の大友龜太郎も、少年の頃鬼柳村の村塾で勉強したことが記されている。私は小田原地方の精神土壌に子弟教育の願望が強いことに注目している。大久保藩は徳川家の譜代藩で、藩主の多くは江戸へ出て老中をつとめているので、江戸文化との係わりが深いのがその理由ではないかとも思っている。

明治五年、明治政府は学制を發布し、全国民の小学校義務教育を実施した。幕藩時代から子弟の教育に熱心であった小田原人は、藩校の集成館を廃して「日新館」を小学教育の出発点としたのをはじめ、明治六年には啓蒙館、一丁田学校を開校、その後明治二十五年までに、幸学校、宮前学校あるいは新玉学校、緑学校とめまぐるしく改変されながら、二十五年に至って、ついに尋常高等小田原小学校に統合され、これがのちに明治三十三年、男子校町立尋常高等第一小田原小学校と、女子校町立尋常高等第二小田原小学校の二つに岐れたのである。

北条早雲知計の事

北条早雲、盲人は無用の物として小田原領分のみから法師をからめて、海にふしづけに沈めんとせられしかば、盲人皆四方に逃げられる。其中を潜かに間(間牒・スパイ)に用いられしとぞ。

〔常山紀談〕

〔註〕『常山紀談』 岡山藩士湯浅元禎(常山 一七〇八八)の著。戦国時代以後の武人逸話集。

又、小田原町だけでなく

る。

足柄村には多古小学校、及びその支校がその他各村々にもそれぞれに村立の小学校が設立されて行った。ちなみに明治二十六年の小田原町の財政書を見ると、総計七、〇二八円の歳出のうち二、七一五円の教育費を計上しており、財政貧困の小田原町にあって教育費に大きな支出をしていることがよく判る。小学校教育だけでは足りない。明治七年には足柄原師範学校が設立され足柄原師範学校と共に九年には足柄原師範学校として開校された。しかしそれらはいずれも数年にして廃校、明治三十四年に至ってはじめて神奈川県立第二中学校が開校され、これが現在の小田原高校へとつづくのである。



カット 高田

烏蘇里江(三)

翠子の場合

隠岐威重

(前号まで) 翠子は昭和二十年五月結婚のため渡満、北の果ての下八宮子で新婚生活を送っていたが、国境警察隊

員の夫は月のほとんど撫遠に出張、戻ってくるのは月一回ぐらいであった。この年の八月九日、ソ連軍が侵攻、戻ってきたばかりの夫は翠子の前でソ連兵により射殺された。

翠子はソ連領に連行されたが、再び満洲に戻され撫遠で県長の取調べが始まることになる。

県長の取調べ

県長(中国人)の取調べが始まりました。

「私は戦前横須賀にいた。日本語も話せるし、日本人の気持もわかる。だが、残念だが日本は戦いに敗れた。敗れた以上当然つらいことがある。しかしあなたはよく生きなければならぬ」と県長は哀れな女捕虜に静かに語ります。でも唯一人

生き残った私の気持は県長の言葉には溶けませんでし

た。「強く生きよといわれても たった一人の日本人、どうすればいいのです。教えてください」

強い言葉で申しました。

「あなたは、看護婦は出来ますか」と県長は静かに申します。

「いいえ、出来ません」私はぶっきらぼうに答えました。

「……………日本は侵略国だ、ソ連に敵対し、満洲の中国人を圧迫し……………」

「……………そんなことを云われても、今更貴方から聞くとは思いません。殺してください、ほかの撫遠の日本人と同じように」

もうどうでもいい、そんな気持が強くございまして。県長は語調を下げて、「そんなことは云わずに、

生きて日本に帰りなさい……………貴女は朝鮮人の家に厄介になる気はありませんか?、中国人はどうです」と暗に結婚をすすめます。

「ここで辛抱して、佳木斯に出る便を探し、日本に帰る道を探してはどうですか、わたしは朝鮮人の李という人の所に一応貴女を預かってもらおうと考えているが……………」

そんな話の最中に、血塗れのシャツを着て、びっこをひいた若い日本兵が縛られてまいりました。

私にその兵士を知っているかと申します。撫遠を何も知らぬ私は知る由もございません。血だらけの若者も私を知りません。その若い兵士は申しました。

「私は中西中尉(撫遠の日軍守備隊長)です。これからソ連に連れて行かれます。お元気で……………」

裸足のその兵士の後姿は忘れられませんでした。

夕刻、県長は私を朝鮮人の李さんの所に連れて行きました。李家の老父は日本人を見ると、そんな恐ろしい者を連れてくるな、と地面に座り込んで県長を拝んでおりました。

「衣類も、家具も食料も、この人が入る間中、余るほど持って来るからグズグズゆうな」と県長は声を荒げて申しました。

間もなく約束の品が届けられました。何れも日本人の家から持って来たものでした。

ソ連憲兵と県長が毎日来て、外出するな、兵隊が何をするか分らない、貴女に何かあれば私達の責任になる、と申し外出を強く止められました。何故、私一人の日本人の女を大切にするのかよく分かりません。今でも不思議に思います。

でも、私は彼等の言葉に背き、日本人の最後の消息を求めて歩き回りました。街では毎晩、ソ軍のベルリン攻略の映画が上映され、みな駆り出されて見せられておりました。西のベルリンに行ったソ連兵と、ここ極東の果の撫遠に来たロシア兵とは、どうしてこうも違うのでしょうか。狭い街ですから、何処かで聞くのでしよう、ソ連兵が、中国の不良老年が、夜となく昼となく言い寄ってまいりました。

「こんな処はいや、私は死にたい」と県長に申しますと、

「中国人だけなら処罰できるが、ソ連兵は……………」と人の良い県長は困っておりました。私はいつか県長には甘えていた節もございました。

ウスリー江岸の海青へ

九月二十五日、県長が息を弾ませてまいりました。

「昨日聞いた話だが、撫遠の東、ウスリー江岸の海青という所に、日本婦人が九人まとまって生き残っているそうだ。貴女はそこに行つて、その人達と一緒に冬を越す気はありませんか。お望みなら、そこまでソ連軍司令部の通行証を貰つてあげよう。前の県長の息子夫婦が、海青の南の東安鎮まで行くために今船を準備している。それに乗せてもらうように、私から話をつ」と云ってくれます。私という厄介者から速く逃れたいのかも知れませんが、

それより撫遠よりもっと僻地に九人もの同胞が生き残っていると聞くと、この地で唯一人の私は急に日本人が恋しくなつてまいりました。

舟は帆かけ舟を棒で押していく貧しいものです。黒龍江からウスリー江に入ると、黒い水が碧く澄んで、江岸の景色も何となく女性的な感じがしました。渾水季です。時々舟底をぎしぎしこすりながら、日が暮れると河岸にあがって野宿し一週間かかって海青に着きました。舟着き場では九人の奥さん達に迎えていただきました。

海青とその近くの街に住んでいた国境警察隊員の奥さん達でした。ご主人はその場で殺された方と、その後ソ連に連れて行かれた人達でした。

何故か、海青のこの地には一人の子供もいませんでした。不思議なことでした。

何故？、そのことは、その地に残った女達の口からは一言も語られませんでしたが、でも、それは語られなくとも分りました。

八月九日は夜半からソ軍の猛攻が始まりました。監視所、十数名にも満たぬ少人数、その背後の部落に住む隊員の妻達。

ソ軍の不穏の動きは半年前(ドイツの降伏時)から活発化してまいりました。

ウスリー鉄道の需要資材輸送も一段と力が入り、夜にはソ領の山から、それに答えるように満領の背後の山から、照明弾が不吉に上がり、隊員の妻達を脅かしました。

近いうちに何か不吉なことが起きる。その時には……何の頼りになるものもないこの地、孤軍の地の妻達は、自決を考えることが極自然のことと思いました。

開戦の次の夜明けまでに皆で力を合わせて、八人いた子供さんを絞殺している間に明るくなってしまい母親達だけが生き残ってしまったそうでございます。

その後の彼女達の心の中の重荷、それについては、一人の方も口にされませんが、でも、妾には分かり過ぎるぐらい分かることでございます。

村公所の用務員室に九人が固まって寝泊りして、村のあてがい扶持の食糧をやっと死なない程度に食べさせてもらっていたのです。貧しい僻村、そこに新人

りの私に加わったのでございます。子供の頃住んだ旅順は遼東半島の突端、満洲では特別西南に突き出て、日本に一番近い所です。今頃は林檎が捻り、ゆく秋を惜しむ頃です。

ですが、ここ海青は名こそ海が青いと書きますが、満洲は東北の片隅、旅順とは真反対で、河の向うは、シベリア、もう山々の冬の装いをこらしておりました。

海青は撫遠より小さい街で、昔からウスリー江を隔てて国境交易といえは聞かえがよいが、満洲側から、米、食料品、ソ連側から石油、マッチ、塩等を密輸することので凍りついたウスリー

は、それこそ自由に行き来出来た道と聞きました。私に加わって十名、貧しい部落には大変な出費です。村長は我々に会うと口癖に申します。「お前さん達を食わす余裕は村にはない、早く結婚しろ、生きたければ」と。

中国人か朝鮮人の女房になれとすすめます。始めは笑顔で、次第に怒気を含めてまいりました。

海青に閉じこめられ、動くに動けなくなった幸せ薄

い女達の名前を申し上げましょう。

元からここに居た人では、中野警察隊長の奥さんと妹さん。この奥さんには三人の子供がおりましたが、あの日からおりません。ソ軍の進駐とともに天国へ行きました。

数年後、お二人は、密山に脱出し、奥さんは日本人と再婚、妹さんは中国人の妻になり今も密山に住んでおります。中野隊長はソ軍に抑留、後帰国されたそうです。

与佐さん・辻本さん・松川さんのご主人は戦死、石田・大久保・塚本さんのご主人は抑留、大久保・塚本さんはシベリアで病死されました。それに香坂千鶴さんと私、この十名が越冬いたしました。

大久保さんと私二人は、村長になんと責められようと、中国人とは一緒にいるまいと励まし合いながら暮らしておりました。

翌二十一年解氷とともに、ソ連軍人と一緒に撫遠の警察隊長婦人の伏見夫人が海青にみえ、大久保さんを伴って行きました。無理に連れ去られたものではございませ

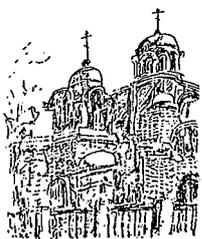
ん。伏見さんには色々とお世話になりました。その後の消息は分かりません。東北弁のきつい方で旧姓は菅野とか申されました。

一番仲の良い友の大久保さんに去られ、村長の強要は止みません。

それで、撫遠の特務機関長の身の回りの世話をしていた張さんの娘さんのお宅に身を寄せました。機関長の奥さんがその娘さんをタイピストの学校に通わせたり、可愛がっていたので私にも親切にしてくれました。

家に来て唐もろこし、小麦の粉を挽くように云われました。親切は身にしてみても有り難かったのですが、騾馬の代わりの粉挽きは騾馬にはかきません。目がくるくる回る重労働でした。

〔註〕騾馬 雌馬と雄ロバとの間にできた一代雑種。耐力あり粗食に耐えるので労役に使う。生殖力はない。



カッター 隠岐

大正・昭和と

著名な文人と交遊のあった

小田原御幸浜・養生館主

西村隆一さんに聞く(七)

小田原詩歌会発足に
寄せた北原白秋と北
条秀司の祝辞

前号で西村さんが鈴木貴介さんと組んで、昭和十六年九月十六日、小田原詩歌会の旗揚げをしたが、一回限りのもので、あと続かなかったことを記した。

しかし、西村さんが大事に保存してきた、北原白秋と北条秀司の祝辞は貴重なもので、次にそれを掲げよう。最初に北条秀司氏の分を。

〔北条秀司の祝辞〕

祝詞にかへて

今日も、山の手の省線に乗って居たら、澄み切った夕空の果てに、箱根山の美しい起伏が見えて居ました。

箱根山を遠望するたびに、小田原の街の姿が眼

に浮ぶ。

小田原は美しい街であった。仕事さへ許せばもう一度住んでみたい街だ。いや、一生住んで見たいとも思う。

私は小田原に勤めを持って居る頃、毎朝、荒久海岸の家を出て、海沿ひの細い道を拾ひながら街へ出た。相模の海の色は、朝のその時間が一等美しいと思った。白い砂浜の向うに大島の煙が白く、小さく見えて居る朝はたのしかった。潮曇りで見えない日もまたたのしかった。

夕暮、同じ道をまた私は歩いて帰った。その時間には、陽は箱根山の向うに落ちて居、その夕明りの中に、双子や駒へ神山がやほらかい頂線をつきりと空を劃って居た。それは実に実に美しい眺

めであった。とりわけ秋の末から冬にかけて、その眺めは美しさの限りであった。

小田原の町は、どの時間、どの場所を歩いて居ても、心がなごみ、愉しいおもひでみだされる。

関東で最も古い文化の花咲いた土、さまざまな文化人たちを生んだ土、その土のいきれが、さうしたなでやかさに、たのしさに、心をみちびいて呉れたのかも知れない。

小田原に詩話会が出来たのも、その土の一つのいとみなみであろう。

詩話会が、小田原に住む文化人の心をたぎらせ、または、小田原に住むあらゆる人の心に文化をたぎらせ、小田原の祖先がつくった大きな文化を、私は心から望み、祈ります。

九月十一日夜

東京にて

北條 秀司

〔北原白秋の祝辞〕

小田原詩歌会の創立を心からお祝い申しあげます。

私もまた、詩歌を通じて

て小田原の自然と人々との間に、壮年期の九年間を交り得た栄光を、今更ながら感謝しております。特に震災を頂点として、その前後に於ける天神山の生活は、私に深甚な作品衝動を与えてくれました。

歌集「雀の卵」を整理し、またその後の「風隠集」、「海坂」の二巻、長歌集として「観想の秋」のちに「篋」、詩集には「水墨集」、童謡集にはその後創造期から木兎の家で運動を続け、民謡はまた「本の笛」一巻を新作しました。また長編散文詩の「雀の生活」や、その他小説二、三に手をつけたのもこの時代でした。歌論や詩論に始めて筆をつけたのも、あの赤屋根の窓ぎわでした。雑誌では「芸術」「自由教育」「詩と音楽」「日光」等の編集しました。

詩歌壇の人々との往来も繁く、あの天神山から水の尾にかけての散策路は、私達にとつては、詩歌の道であり、宝石の道でありました。私はここで最も近い詩友として、

大木淳夫、藪田義雄、今は亡くなりましたが府川恵造君などを知り、また、土地の福田正夫、二見良平君、その他民衆派の若い詩人とも交歓しました。

このとき、小田原は全く私にとりましては、生れた土地、母の里について最も懐かしく、また最も意義深い芸術の母胎であります。叙情詩、小曲集「思い出」の刊行の直後、療養のため西村さんの養生館にひと月ばかり滞在しましたが、それが縁の始まりだったので。小田原で私が授かったのは作品だけでなく、もっと大事なものが三つあります。そのなかの二つは、隆太郎と篋子という名で……。これは失礼しました。

さて皆さん、酒も大いに飲みました。これは大木君が代って弁じてくれるのであります。

皆様の御健康、小田原詩歌会の今後御発展等をお祈り申しあげます。

昭和十六年九月十三日

北原 白秋

北条秀司の祝辞は西村さ



左より二人目から西村隆一氏、菊子、篤子、隆太郎、白秋、藪田義雄、千葉満定(伝肇寺住職)

んに郵送されてきた。一方白秋のものは、藪田義雄が携えてきている。白秋の小田原に対するあつい思いは、のちに藪田が執筆の『評伝北原白秋』(昭和四十八年六月玉川大学出版部)の下敷となっていてと思われる。北原白秋旧宅みみずくの家の整理のため来原(昭和四年一月頃)

しがある。しかし、白秋が詩歌の道と表現した天神山から水の尾にかけての散策路は、開発によって変貌し、昔の面影はない。また、北条秀司の『山と海の美しさは、建物の稠密化、階層化や』

海岸バイパスの建設により、視野を遮られている。これも「現代」という時代の副作用と見るべきかもしれない。

社会が豊かさを増す一方で、文学は衰退し窮迫の度を深めていると、その前途を憂うる作家ないし評論家

がいる。門外漢の私は、その点よく分らないが、そんなのかも知れない。

しかし、文学が全く消滅するとは思われない。時代の強い影響を受け変質しながらも、なお存在するものではなからうか。小田原の風光のなごみが醸し出してきた文学的土壌の永続性を期待したい。それは、あるいは折りともいえる願いのかもしれないが……。

同窓名簿によると、県立小田原中学校第十五回生として大正九年二月卒業、遺族宅は小田原市狹窪一、一九六〇年となっている。

——白秋が詩友として挙げた府川恵造という人は、どういう方ですか？

「この人はねえ、中学が同級生ですけどもね、久野にいた人です。胸が悪くて早死しちゃった。なかなか優秀な男で、惜しいことをしました。あのう、いろんな作品が残っていたらしいんですが、それをねえ、(遺作集として)まとめようと親ごさんたちが考えたらしいですね。ところが、ある人があまり賛成しなかった、というんでね、どうも府川さんの親爺さんとねえ、その人とはあまり良くなくなっちゃたらしいです」

——次に、二見良平という人は？

「この人は十字町(現南町)にいたんですね。箱根口がありますね。そのもう一つ

「これは、前の三浦市長をされた方からの質問ですが、△若山牧水が養生館のテニスコートでテニスの試合をしているということですが、テニスコートがあったでしょうか▽というお尋ねです」

「これは、前の三浦市長さんが、先日よこした手紙なんです、私には耳よりの話で、なにも知らなかったことなんです……。」

私は、白秋が始めて小田原に来たのは、大正七年(一九一八)とばかり思っていたのに、そうじゃないんですよ。私のところに明治時代に泊ってるんですよ。この

「これは、前の三浦市長をされた方からの質問ですが、△若山牧水が養生館のテニスコートでテニスの試合をしているということですが、テニスコートがあったでしょうか▽というお尋ねです」

「これは、前の三浦市長さんが、先日よこした手紙なんです、私には耳よりの話で、なにも知らなかったことなんです……。」

私は、白秋が始めて小田原に来たのは、大正七年(一九一八)とばかり思っていたのに、そうじゃないんですよ。私のところに明治時代に泊ってるんですよ。この

手紙には、明治四十二年(二六)十月、養生館に滞在して「白秋が二十四歳のときになる」養生館の絵葉書を志賀直哉に差出しているんですね。

そういう新しい、私の知らないことがまだ出てくるんです……。

とにかく、小田原は震災(大正大地震)で燃えちゃっ

たんで、それで、町でも役所でも記録がみんな無くなっちゃって……。震災で、私のうちの近く迄焼けてきたんですからね。うちは焼け残ったんです。ところがねえ、正恩寺から代官町からその先まで焼けてしまつて、こっちから見ると小田原の街ががらっと空いちゃったんです。町役場も焼けて

しまいました。それだからねえ、私は思うんですが、その時分の古い地図とは相当違つてるところが出たんじゃないかと思うんですよ。それで、他所に残つていたので、登記の元にしたらしいからねえ。だから古い元の施設と多少違いが出てんぢゃないかと思つますよ。ともかく、小田原は大震

災でぐつと変わっちゃたんです。……私の家は、もと三階みただったんですよ。一番下が物入れでね。それがぐらつといつたんでしょ。家がぐちあぐちあになつて雨が漏つてねえ、宿帳なんか相当あったんですが雨にやられて、今その一部が残っているだけです」

——養生館の建物を取毀された跡はどうされるんですか？

「八百近くあるんです、坪数が。子供に分けてやってしまひます。三百坪以上は開発ということで、いろいろ手続が必要で手間がかかりますが……。

養生館という名だけはなんらかの形で残したいとおもっています (完)

今ふりかえる

シベリア抑留(二)

齋藤理一

木々は紅葉をはじめ、冬の訪れで、夏服では寒い。秋の短かい北満は雪がちらつく季節と交って行く。梅林収容所も残り少ない人員となつて、部隊各中隊の人事係等役三十名が最後に残っていた。

やがて、南の方から作業大隊を編成してこの収容所に入つて来た、戦争を経験していない兵隊の集団と共にソ連に向つて出発することになる。

ソ連の指揮官より伝達、

「君らはソ連を経由しウラジオストックより乗船、帰国をするものである」

一同歓声を挙げてバンザイ。

日本の指揮官の大尉も「唯今より祖国日本に向つて出発する」「前進」の号令をかける。

綏芬河の国境を列車が通過したのは、十一月三日の明治節のめでたい日であった。あたりは白一色の銀世界である。

いよいよシベリア入りである。

カタコト、ガツタンと鉄道は北へ向つてはしつていく。貨車は左右二段にしきられ、中間にトタンで小便用のトイレが造られている。列車は時おり半日位停まることがしばしばである。

どうも、おかしい？

何日か列車に乗つた。下車するとトラックに乗せられ、途中で降ろされ徒歩である。目的地に到着すると着剣の警備兵が前後を固めて付いてくる。

あたりに部落はなく、崩れかかった丸太の建物が五、六個立っている。望楼が四箇所に置かれていて、流刑地の建物に違ひない。

だまして、連行してきたのだ。

われわれが収容されたのは「二〇三分所」という。

シベリアの寒さは想像より厳しい。零下四十度も下るようだ。この分所は、ハバロスクより一昼夜もかかるところで、近くにテルマアイスクという部落があると聞かされたが、今でもその位置は、はっきり分っていない。

開けても暮れても枯れた木を取りに行く。取りに行く場所がだんだん遠くなつていくので、午前一本午後をだらだら歩いて運ぶのが精一杯である。結局は自分の暖をとる薪であった。

こんなことでよいのか、と思うが、しかし、粗末な雑穀のお粥で消耗しきつた体であつてみれば当たり前なことである。

やがて収容所は、「二〇五」「二〇八」と変つたが、

なお、白秋の小田原詩歌会創立の際の祝辞は、お借り出来なかつたので、テープに採録しましたが、誤りがあつてはいけなかつた、その祝辞と照合のため、西村さん宅、資料の寄贈先の小田原図書館、郷土文化館を尋ねましたが、現在のところ見当りません。勿論、白秋の全集には収録されていません。(岡部忠夫)

弱い体の者は検査のたびにいなくなつて、労働に耐えるものだけとなつた。

それだけに朝起きてみると隣の戦友は冷たくなつていたという情景にはぶつかりなかつた。しかし、作業はノルマで、次第にきつくなつていった。作業は、鉄道の路盤工事が主体であった。以前にシベリア鉄道の支線であつたのか路盤の跡

が低くなっている処もあつた。

一年も終り二年を過ぎた頃、いつ帰れるか分らず半ばあきらめが先にたつていった。見せしめのためと思われる「ハラシヨウラポータ」作業能率の上る者を千名単位で五名程帰還させる方法をとって来た。又は病弱にならなければ帰れない。ままよどうでもなれの極限状態に置かれてしまっている。

その中で作業はどんどんきつくなってくる。食事にしても一切の黒パンと雑穀スープが飯盒の蓋に一杯、その糧秣も満洲から運んだものである。

どうしてこの体を守って無事祖国の土を踏めるのか：。战友といえどもお互にかばう術もない。仲間同志で反目することも度々であった。

さいわい命ながらえ、四年間の抑留生活を終え、舞鶴へ上陸、無事祖国に辿りついたのは、昭和二十四年八月のことであった。

体を損わずに健康を取り戻すにはお粥から出発しなければならぬということであったが、家に着くとす

ぐ様、赤飯で祝って貰った。お粥どころか酒も用意され

親子兄弟の祝宴となった。思えば、入営以来八年七カ月の歳月である。話は尽きなかった。

シベリアの食事考

男ばかりの生活が続くなかで、ただ食べることで、そして腹一ぱいの満腹感を味わうことが唯一の願いであった。

酒なんてとつてもありつけない。火酒はうまい酒だといわれても、とても手に届く処にはない。晩酌の味などどつくに忘れられている。酒のことなど一つも話に出ない。

次に女のこと、全く話題にのらなかつた。妻帯者はどうであつたか我々独身者には分らないが、ただ食べることしか頭にない。作業の昼食時に薪火を囲んでの話題は、出身地のうまいもの自慢話。

お萩と牡丹餅はどう違つか、ぜんざいに砂糖をかけて食べる九州地方の話、雑煮は味噌味か醤油味か、餅は丸いか四角であるか、だしは煮干しか鰹節か、話は尽きない。しかし、つまる

ところは絵に書いた餅、ただ唾をのみこむしかない。

たよりの黒パンは串にさされて何グラムか分らぬが目見当で大きいのを狙う。スープは飯盒の蓋に一ぱいの高梁の粥である。この粥しぶくて便秘になりがちだ。食事の雑穀は一週間毎

に変わる。大豆のスープはうまいが体が衰弱しているの下痢患者が続出し、食べられない者が出てくる。その食べ残しを貰い、満腹感を味わうが、やがてそれも下痢となっていく。小豆のスープは粒がくずれて唯の汁だらけ。退院してきた者に聞くと病気の食事はオートミルであるそう、燕麦のお粥である。白飯が連想される。銀しゃりで沢庵パ

リバリといきたいと思う。いっぺん入院してそのオートミルにありつきたいものだと考えてもどうやら体をもって入院患者とはいかない。

毎日の食事も変化なく、ビタミンなどの不足が感じられ何か青いものを食べなければと思う。葷が生えるあたりをちよつと入って、ヤハタ取りに出かける。三十センチ位の木にブドウの

半分位の大きさの粒が鈴なりになっている。澁いがとても甘い味であつた。歯が紫色に染まるまで我武者羅に食べる。しかし、翌朝は歯が浮いてしまいがクガクグしてしまつので食事に差支える。

秋になると作業の合間に森林に飛び込む。大きな厚い茸が沢山はえている。日本ではお目にかからない茸である。五つも取れば飯盒で煮て一杯になる。昼の塩干魚を食べずにとつておい

たのと一緒には煮る。実にもうまい。各々が腹に流し込み久々の満腹感を味わうことになる。

短い秋が駆け足で過ぎると再び長い厳寒の冬となつて寒さとの戦いの季節に入

る。雪が解け出して、懐かしい黒土が現われ始めると、森の木々にも急に春がやってくる。伐採作業で鋸を入れると、どの木の切り口からも樹液が多量に滲みでてくる。森の木の春の目覚めである。いろいろの樹液を舐めてみると、白樺のものが甘いことが分つた。若樹にナイフを切り込み、小さな枝を差し込んでおくと、

樹液がそれに伝って落ちてくる。飯盒で受けて置くと半日で半分位はたまつてくる。最初の一口はとても甘い、生臭くもある。ただの水を飲むより元気が出るような気がするし、なんだから自分が生きている実感となってくる。

青い野菜を食べなければと思う。食べられそうな草を手当り次第採す。葉に少しケバの生えたような草を見つけ、岩塩を少し入れて茹でオヒタシにすると非常においしい。名づけてシベリア法蓮草、生きていくための知恵である。

蛇や蛙は、みつけ次第胃袋に納められる。蝮は子腹の中に入り、青大将は卵であることをシベリアへ来て知つた。沢山食べると鼻血がでるぞと誰かがどなる。

……

そして、今日も陽が暮れる。食べ物のことが少しも頭から去らずに……。 (続)

会員計報

山口静枝氏(松田町松田惣領、二六番地)平成二年八月二十八日逝去されました。享年七十二歳
ご冥福をお祈りします

相州曾我岸村と

天津神社(二)

にしやまけいたろう
西山 銈太郎

五、十二天さんと

天津神社

本稿を草するにあたり一番頭を悩ませたのは、十二天さんを何故天津神社と云うのか、十二天さんと天津神社はどんな関係にあるのかだった。

全国の郷社以上又はそれ以下の極く著名な神社中「天津神社」を探してみた。新潟県糸魚川市一ノ宮神社、島根県邑知郡邑知町吾郷郷社、岡山県直庭郡落合町高屋郷社の三社で、何れも数柱の神様を合祀してある。強いて云うならば新潟県県社・岡山県の郷社の祭神の内天児屋根命だけが、両社共通の祭神として見られるだけだ。全国の町村社以下の神社を調査したらどんな結果になるか、これだけを見る限りでは祭神様と天津神社とは関係ないらしい。天と地の神様と云う意味

で天津神十二天神社、天津神社、天津神社と云う事になったのだろうか。有識の士の御教示を得らるれば幸である。

六、曾我岸地蔵尊

私は曾って『小田原史談』(昭和五十三年五月)に「曾我岸地蔵尊」なる一文を書いた。それは明治中期に行われた「地藏さんのお開帳」と、子供の頃から公民館になる迄の自らの体験した事柄を書いたものだった。

「柏木文書」の中にも延宝元年一月本尊は石地藏と書かれてる如く、私の知る限りに於ては地藏堂又は地藏さんと云われ、石地藏が祭壇の中央にあった。石地藏さんは子供達が祭壇へ上つてのゆさぶりで、床が抜けて地へ落ちてしまった事があった。その頃閻魔さんの像はあったが、他は何様のとも知れない木像の破片が

あり、又「曾我岸地蔵尊」のお姿を彫ったお札用の版木もあった。

七、寺山

曾我岸村時代からの住民は殆どが、仲河原曹洞宗瑞雲寺の檀家である。曾我岸村時代から後の山の中腹で、曾我岸内の地籍に通称「寺山」なる地名があり、今日尚生きた地名である。終戦直後の農地解放迄、この附近には瑞雲寺所有のみかん

畑が大分あったが、今日でも寺有山林が二町歩余りもある。

私は子供の頃から寺山は岸の檀家が寄進したものと何回も聞かされたが、村人達もこの事は皆よく承知していた。

瑞雲寺では十数年前庫裡・檀徒会館等新築の計画を立てた。その資金の調達には差し当たり必要のない財産(暗に山林を指して)を処分せよとの意見が出たが、

曾我岸の者達は挙って、寺の財産は総て祖先の寄進したものだからそれは駄目だと、言葉強く反対意見を述べた。柏木文書は此の事実をはっきりと裏つけてる。

相州西郡之内曾我岸村

相州西郡之内曾我岸村
瑞雲寺(寄進願)

山荒畑 拾貳間

下畑 拾貳間

山畑 拾貳間

山荒畑 拾貳間

下畑 拾四間

山畑 拾六間

山荒畑 拾六間

下畑 拾六間

山畑 拾六間

山荒畑 拾六間

迄為村内安全瑞雲寺(寄進願) 慈悲御願届、被下置候ハ、為仕合奉存候 仍御願書如件 寛永十七年 九月十二日 曾我岸村

仁左エ門

市郎右エ門

曾右エ門

藤左エ門

金右エ門

善右エ門

太左エ門

太郎左エ門

長右エ門

検地御改

松崎源右エ門

安野九郎左エ門

諸屋左左エ門

森崎彦左エ門

右願上之趣早速相州瑞雲寺江奇附致事依

而書付如件

右之畑九處之義者御改方より御内意被頂候付名主組頭小前一同被相談ヲ御改方願罷出候趣此度私共御願之趣右之畑九處御免地奉願上先祖菩提子孫為繁栄末

郷土関係の刊行物 平成2年7月~12月
小田原図書館並びに3書店調査

- ◇小田原市史 史料編近世Ⅲ 藩領2 小田原市刊 A5 841P ¥5,000
- ◇おだわら一歴史と文化 第4号 小田原市文化室編 A5 144P ¥1,000
- ◇小田原と文化 石井富之助著 小田原文芸愛好会刊 B6 230P ¥1,280
- ◇目で見える小田原・足柄の100年 内田四万蔵・市川健三・生沼精治・播摩晃一編 郷土出版社刊 B4 182P ¥9,800
- ◇箱根 監修 岩崎宗純(歴史) 田代道弥(動物・植物) 神奈川新聞社刊 A5 272P ¥1,500
- ◇小田原市制50年誌 小田原新聞社編・刊 A5 364P 特24P ¥3,500
- ◇戦国遺文 後北条氏編 第2巻 永禄8年(1564)~天正2年(1574) 杉山博・下山治久編 東京出版刊 A5 271P ¥9,800
- ◇早雲寺 箱根叢書20 早雲寺研究会著 神奈川新聞社刊 新書判 279P ¥950
- ◇禅画報(季刊) 風外慧薫特集 千真工芸刊 A4 64P ¥1,030
- ◇西さがみ庶民史録 No.25 特集西さがみの歴史物語を読む 西さがみ庶民史録の会刊 A5 48P ¥740
- ◇多古の郷土史 野頼徳治編著 小田原第44区自治会刊 A5 380P
- ◇足柄の野の花Ⅱ 文内田勇 絵内田とも子 自治新報社刊 タテ・ヨコ20cm 55P ¥1,000
- ◇山の神の民俗と信仰 丹沢・桂川・足柄 佐藤芝明著 丸の内出版 B6 276P ¥2,060
- ◇一夜城茶道記 利休と宗二と秀吉(小説) 西蓮太郎著 B6 80P ¥600 (郷土にかかわりある方の著作)
- ◇大地震そのときどうする 山村武彦著 五月書房刊 B5 224P ¥1,380
- ◇生活の歳時記 松本昇平著 伊勢治書店刊 B6 82P ¥500
- ◇鮎(小説) 小田淳著 叢文書刊 B6 282P ¥1,545
- ◇日本映画の時代 廣澤栄著 岩波書店刊 DL判 302P ¥850
- ◇中国点描(写真集) 小野利光 B5変 187P ¥3,000
- ◇旅支度Ⅱ 文徳田正章 写真 北川和夫 B6変 55P ¥1,000
- ◇画乱洞仙人(伝記小田原出身) 有馬テル著 大阪・浮遊社 B6 125P ¥1,500
- ◇君を見上げて 山田太一著 新潮社刊 B5 270P ¥1,300
- ◇如是閑文芸選集Ⅰ小説 岩波書店刊 A5 327P ¥4,200
- ◇自由民権の地下水(北村透谷についてふれる) 色川大吉著 岩波書店 DL判 267P ¥780
- ◇ゼーロン・淡雪 牧野信一 岩波文庫 317P ¥570
- ◇白秋全歌集第1巻 岩波書店刊 A5 624P ¥6,500
- ◇三好達治隨筆集 岩波文庫 308P ¥520
- ◇魔球の伝説 吉目木春彦著 講談社刊 B6 221P ¥1,250
- ◇あとがき大全 夢枕漢著 波書房刊 B6 318P ¥1,500
- ◇鳥葬の山 夢枕漢著 文芸春秋社刊 B6 373P ¥1,300
- ◇俳史ドキュメント 薫風懐古 増田武夫著 B6 281P ¥1,200
- ◇彩雲句集 小林無人(軍二) 高田掬泉編 B6 64P
- ◇箱根路(隨筆集) 戸上寛子著 近文社刊 新書判 75P ¥700 (自分史)
- ◇女の一生 磯崎ナカ著 B6 211P
- ◇ばあばあのためごと 福田綾著 A5 197P
- ◇蜜柑の花と三無齋 中井一郎著 B6 337P

小田原出身の新人作家

吉目木春彦氏

吉目木春彦君が作家として活躍しているのを知ったのは最近のことである。それも、書店が客に無料で提供している新刊ニュースからで、ぱらぱらとめくっていると、その略歴が目についた。

よしめき・はるひこ 一九五七年小田原市生れ。成蹊大学法学部卒。現在コニカ(株)勤務。八年『ルイジアナ杭打ち』(講談社刊)で野間文芸新人賞受賞。近著『魔球の伝説』(講談社)、『誇り高き人

談社)、『誇り高き人

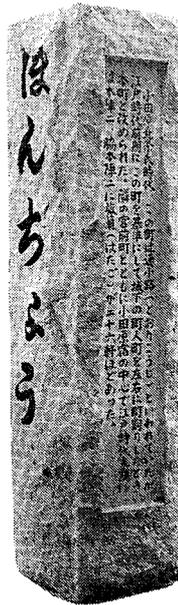
々(講談社刊・九一年新春刊行予定) ところで、あらためて吉目

木君の「お勉強の時間」の一文を読んだ。もし末尾の略歴に小田原市生れとなかったら、おそらくこの一文は見過していただろう。

……私も一応大学受験を経験してはいるものの、かつて自分が受験生であったという実感はない。

小田原旧町名保存碑

『本町』(小伊勢屋前)



中学・高校と武蔵工業の付属に通い、入試は大学一回きり、それも高校三年になってからようやく受験勉強を始めたくらいで、つま

りは世の中をなめていた。親のスネをかじりながら小説が読めればもうけものという、不埒千万な了見の報いで、いざ本番では、落ちた



材木屋綺談 その三

たかた・きくせん

それは昭和十一年、二・二六事件の日であつた。私は早期小田原を發つて東京深川の木場に仕入れに出かけた。東京は一面の銀世界であつた。銘木店の台湾楠の柵板八十枚ほどを見かけてこれを賣つた。三千

円という高値で思い感つたが思ひきって買った。その頃は準戦時体制で樟腦の原料になる楠樹の伐採が禁止されていたからである。その夜私は帰宅してその日の反乱のことを知った。

売っても売っても

減らない打出の小槌

楠の柵板

やがて昭和十五年には木材統制となり、材木屋はいっせいに廃業させられ、在庫品全部を供出した。しかしこの楠柵は大半がまだ売れ残っていたが、余りに惜しいのでひそかに納屋に隠しておいた。翌年には太平洋戦争となり、私は妻子四人と両親を残して出征、大陸へ渡つた。帰還したのは敗戦翌年の昭和二十一年の春である。留守を預かった父はこの隠しておいた楠柵を夜間大八車に積んでひそかに前川の漬物屋に運び塩と交換した。すでにその頃は物資統制がやかましく昼間大手を振って商売は出来なかつたのである。父はその塩を再び大八車に積んで農家に運び、これを米と換えたのである。楠柵のお蔭で私の家族は戦時中の飢から免れたのであ

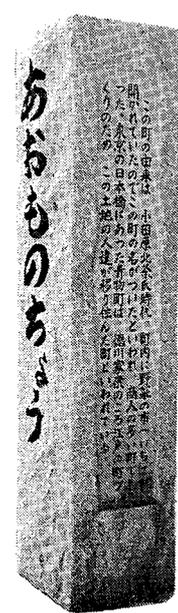
る。さて私が帰還したとき、楠柵の板は一枚だけ残っていた。この最後の一枚を売つたのだが、これが何んと仕入値と同じ三千円で売れた。その頃は物資不足のまっ只中で買手も喜んで引き取つて行つた。考えてみればこの楠柵は私にとってまさに打ち出の小槌で、何度売つても売つても依然として在庫が減らない不思議な宝であつたのだ。もちろんこれはインフレーションのからくりによるのだが、私は今でもこの楠柵には感謝している。

おそらく父の外国勤務に伴つてのことであらう。いふなれば吉目木君の小田原での小学校時代は短い。本町小学校に入学したのは、昭和三十八年四月のこと。私の倅とクラスは違つていても、近所だったので登校のときは、倅をよく迎えに来たし、帰ると共に遊んだ友であつたが、二、三年頃であつたか、小田原を離れて転校していった。しかし、本の奥付に小田原市生れとあるのは、吉目木君の本籍が小田原にあるので(確かめてはいないが)、編集者が奥付の体裁を整えるために載せたのではなく、きつと、吉目木のふるさとその心を培つた土壌の基は、小田原にあるからに違いない。私はそう信じたい。なお、吉目木春彦はペンネームでなく本名である。(北野 誠二)

落ちた。中央・明治・青学・日大・武蔵・立教と見事にすべる。それでも本人はいっこう応えず、浪人する気などさげに無し、コックの修行をして貨物船の料理人になり、外国へ行こうなどと考えていた。成蹊大学で拾つてくれなければ、今頃ペルシャ湾で、飛び交う偵察機を眺めながら目玉焼を作っていたか

もしれない。要するに、受験の苦しみなど味わっていないわけで、当時も今も、試験の夢など見たことがない。……『魔球の伝説』に載る略歴にはさらに、昭和四一年〜四三年ルイジアナ州バトンルージュ市で生活し、その後バンコクへ渡る。アメリカ大リーグ特に一

九一〇年代から一九五〇年代までに存在した黒人大リーグの記録収集に凝っている。がつけ加えられている。過去のしくじりを——本人はそう受けとめているかどうか分らないが——さりとて言いのけられるもの、のびやかに育てられたからでもあろうし、また、天性のこせつかない資質があるのかもしれない。



アメリカでの生活は、計算してみると九歳頃から十一歳までで、十二歳のときにはタイランドに移つていたことになる。小学校時代の大半を外国で送つた訳だ。

小田原史談会 諸行 事

信濃路史跡探訪
平成二年十一月八日(休)

六時三十分出発、小諸城址(懐古園)―上田城址―生島足島神社―上山田温泉(上山田ホテル)泊。十一月九日(休)八時三十分出発、真田宝物館・旧真田家別邸・松代藩文武学校―象山記念館・

象山神社―川中島古戦場―小布施町・北齋館・高井鴻山記念館―長野善光寺。七時三十分帰着。参加費二万六千八百円。

予報では二日目の天候が危ぶまれたが両日ともに恵まれた好適な史跡めぐり日和であった。藤村の「千曲川旅情のうた」で一躍有名になった小諸城址は何回見ても心新たにす。真田昌幸が築城の上田城址では、石畳空濠にその昔を偲ぶ。延喜式に

の生島足島神社の本殿は、床を張らず直接大地を祀るといって特殊構造。上山田温泉は明治初年に開発。真田宝物館では真田家末裔が寄贈の歴代城主の甲冑、武器を始め書画、古文書等々文化的史料の多いこと。小田原藩と較べよく保存されてきたとの思いがする。国指定史跡、江戸後期建築の旧真田別邸。同じく国指定史跡、江戸後期建築の松代藩文武学校は当時の面影

と遺構を伝える。象山記念館では、彼の奇才ぶりに驚くばかり。信州の誇りとして象山を祀る象山神社。川中島古戦場では年を追うごとに環境が整備されてきたことが眼につく。葛飾北斎の肉筆の絵約四十点、祭り屋台二台の天井絵を展示する北齋館。その素晴らしい腕前はいうまでもないが、その着想と新しい美の創造には、たゞ感嘆するばかり、小布施の町おこしの核心を

丹沢の植物

⑦

城川四郎

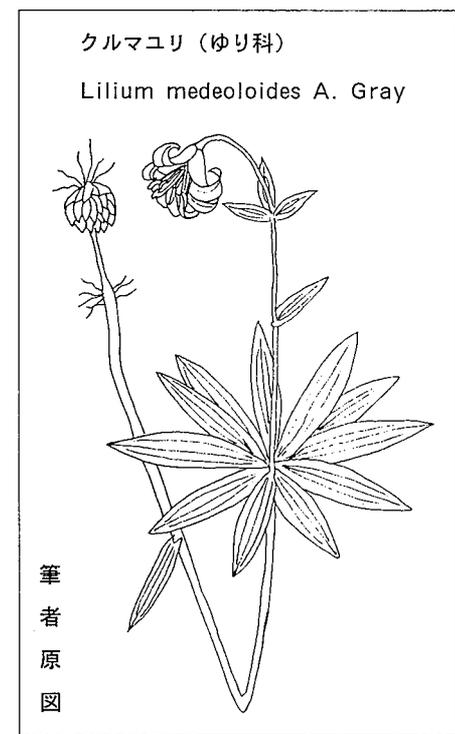
丹沢に高山植物がありま

すかという質問を受けることがある。そんなとき、私の脳裏には丹沢の尾根に咲くクルマユリが、北アルプスや南アルプスのお花畑に咲いていたクルマユリの映像と重なって浮かんでくる。そして、え、ありますよ、高山のお花畑に咲く花が丹沢にも咲くんですよと答える。丹沢は最高峰の蛭ヶ岳でも一、六七二米の標高しかないのです。高山とはいえないし植物学上での垂直分布帯からいえば丘陵帯、山地帯、亜高山帯、高山帯の四つに分けたうちの山地

帯にしかはいらない。

だから高山植物をむずかしく定義すると丹沢に高山植物があるはずがないことになる。でも、丹沢に高山植物があるかと問う人は私の答えで満足して下さったに違いない。丹沢の尾根に咲くクルマユリは確かに高嶺の花の雰囲気がある。猛暑急坂のある。登山道を喘ぎながら登りきって、この花が尾根に吹き渡る涼風にそよぐのを見た人は、こ

の花との出会いにきつと感動するからである。クルマユリは葉が茎の中ほどに車状に輪生しているところから車百合と呼ばれ、花はオニユリなどに似て朱赤色で濃紅色の斑点があり、上半部はそりかえっている。亜高山の草原によく生えてお



クルマユリ (ゆり科)

Lilium medeoloides A. Gray

り、お花畑の主役になることもある。

県内では箱根にも記録があるが丹沢に分布が多い。しかし、個体数は多くないので大切にしたい植物の一つである。
(筆者は元神奈川県立愛川高等学校校長)

なしている。史跡めぐりの締めくくりは善光寺。
なお、甲斐路の車窓西に仰ぐ富士の雄姿、折りから紅葉シーズン真盛りに車窓を彩る佐久路など景観は、今回の探訪に華を添え、史跡とともにも心深く思い出に残るものがあった。解説に当たったのは、高田喜久三、小田中正二、和田登、吉池清、岡部忠夫の諸氏。とりわけ長野県出身の小田中、吉池両氏の車窓からの説明は微に入り、細に入り流石だった。
参加者は次の通り(順不同)
高田喜久三、和田登、小田中正二、曾我保夫、岡部忠夫、吉池清、本田康子、徳永トキ子、小平信之助、伊藤高子、山口隆男、広子、山室定尾、神野美代子、石井艶子、田島迪江、松本敦子、佐藤栄子、時田満子、杉山久江、山口一夫、角田道、剣持芳枝、木曾シゲ子、久津間愛子、湯川玲子、安藤繁美、長沢稲子、藤田和子、額田常子、原秀子、金子慧子
(以上三十二名 敬称略)
初詣 富士宮・浅間神社
平成三年一月二十日(日)八時―五時。コース 富士市・曾我寺(伝曾我兄弟の墓)、富士宮市・浅間神社と湧玉池、ふじのみや奇石博物館、工藤祐経の墓・伝曾我兄弟の隠石、静岡県宮崎

特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店
 小田原銀座 アオキ画廊
 足柄香粧株式会社
 飛鳥 魚屋
 紳士服のアメリカヤ
 画材 ガクブチ ふうえ
 伊勢治書店
 かまぼこ
 株式会社 江島
 株式会社 小田原魚市場
 小田原ガス
 小田原信用金庫
 小田原報徳自動車
 株式会社 オートセンター・スギヤマ
 小田原中央青果 株式会社
 オリオン座
 かまぼこ籠
 令学館
 鐘紡株式会社小田原工場
 カネボウ化粧品鴨宮工場
 かみやま小児科クリニック
 興電社
 小伊勢屋
 正榮堂
 中華料理 昇玉

鈴木廣木まほこ
 辰寿堂スポーツ
 大営不動産
 割烹おるほ
 二宮
 茶半家具株式会社
 ちんぎょう本店
 角田ガクブチ店
 東京電力(株)小田原営業所
 株式会社 東華軒
 トーホー建物器店
 八小堂書
 八子マサ店
 平井書
 富士写真フィルム(株)小田原工場
 株式会社 報徳屋
 * 町 松坂屋
 学生専科 マルク
 食器の店 マルサンストアー
 株式会社 美濃屋吉兵衛商店
 みみづく幼稚園
 やオマサ株式会社
 山口菓子舗
 湯浅電池(株)小田原製作所

の家(昼食)、音止の瀧・白糸の瀧、御殿場浅間神社(車内通拜)。終日温暖好天に恵まれ、雲一点もない朝富士、夕富士を仰ぎながら山麓を一周、東富士高遠道、国道二四六号を経て帰着、快適な初詣の日であった。費用七千円(うち昼食代三千円。奇石博物館入場料四百五十円は会費負担)駿河国一の宮富士本宮浅間神社は、世にいう浅間造りで、その華麗さと共に類例のない特殊構造は印象深く、社殿東側の湧玉池の湧水量の豊かさには眼を見張るものがあった。よく知られている曾我兄弟の事蹟と白糸の瀧の名勝。奇石博物館は、いままで見たいことのない珍しい世界中の石が多数展示されていて、興味をそそられ見ごたえがあり楽しく一見に値し、鱒の家のマス料理は、川魚特有の臭みは全くなく、その献立内容は充実したものであった。解説には、高田、富田、小田中、和田、吉池、岡部の六氏が当たった。

参加者次の通り(順不同)
 高田喜久三、富田千春、曾我保夫、小田中正二、岡部忠夫、吉池清、西山銑太郎、静、和田登・ヤス子、山口一夫、小平信之助、木曾正雄・シゲ、加藤金次・松江、岩本武、関田トミ子、稲子藤江、柏木ミツ、湯川玲子、山口広子、剣持芳枝、南陽子、土岐静子、森美奈子、江崎喜夫、高久雄子、小山俊夫、増山昂子、菲山鳩美、中沢鋺子、石井艶子、田島ミチエ、吉崎ヨシ江、中村俊郎 (以上三十六名 敬称略)

平成三年二月十六日
 講演会
 (午後) 於小田原図書館
 演題「酒匂川の徒渉」講師 野頼徳治氏。
 出席者次の通り(順不同)
 曾我保夫、岩本武、西山銑太郎、山口隆男、湯川玲子、山口わか、高田喜久三、和田登、吉川保、時田満子、中沢鋺子、河本登志、剣持芳枝、吉崎ヨシ江、奥津定、奥津チヨ子、長田勝義、水渕や姥捨山の風情し
 (懐古園にて)
 和田 登仙
 崖深く真赤な紅葉小諸城
 (上田城跡にて)
 隅櫓古りて黄落まっ盛り
 (上山田温泉通り)
 (松代・真田邸にて)
 落葉道六文銭の門くぐる
 (佐久間象山記念館)
 和綴ちなるオランダ本や朴落葉
 (富士宮浅間神社にて)
 冬晴れの富士借景に大鳥居
 (富士の湧水群)
 春旅や溶岩より湧水掬う
 (曾我寺にて)
 榎冬木富士の裾野に墓二つ
 卷狩の館はいづこ冬ざれ野
 熱き茶や冬富士一目バスに添う

◎岩崎宗純氏の「小田原の浮世絵」、飯田悟郎氏「古墳遍歴」、岡部忠夫氏の「紅蓮洞・坂本易徳」は紙面の都合により次号以下に掲載します。
 ◎次号は六月発行の予定です。